

この世のオアシス

〔聖書〕詩編 133 編 1～3 節 ダビデがよんだ都もうでの歌

見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。
かぐわしい油が頭に注がれ、ひげに滴り、衣の襟に垂れるアロンのひげに滴り
ヘルモンにおく露のように、シオンの山々に滴り落ちる。
シオンで、主は布告された。祝福と、とこしえの命を。（新共同訳）

〔序〕オアシスのような教会

皆さん、お早うございます。お招き下さいまして光栄です。富里教会の今年の聖句は「神の家族」ですね。パウロは若いテモテへの手紙に、こう言っています。「自分の家庭を治めることを知らない者に、どうして神の教会の世話ができるでしょうか」（第一テモテ3:5）。パウロは、教会をキリストを首とする仲の良い家族と考えていたようです。ですから牧師には、家族が助け合い、子供たちが伸びやかに育っていく和やかな教会家族を形成していく資質が求められていると言ったのでしよう。

さて私に示された今日の聖書の言葉は「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」です。他の訳と比べてみましょう。口語訳「見よ、兄弟が和合して共にいるのは、いかに麗しく楽しいことであろう」。新改訳「見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう」。カトリックのフランチェスコ会訳「見よ、兄弟がむつまじく住むのは、なんとうるわしく、こころよいことか」。

新改訳が「兄弟たちが一つになって共に住むことは」と訳し、フランチェスコ会訳が「見よ、兄弟がむつまじく住むのは、」と訳した原語が、口語訳で「和合して共にいる」となり、新共同訳では更に単純化されて「共に座っている」となっています。そうです。兄弟が仲良く一つに結ばれて暮らしているから、一つの食卓を囲めるのです。

「子供たちが皆仲良く食卓を囲んでくれる家庭でありたい」と、どの親でも願います。ところが兄弟が仲良く暮らすことが、これまた何と難しいことでしょうか。兄弟が一番身近なライバルだからでしょう。聖書の中の最初の殺人が、人類最初の夫婦といわれるアダムとエバの息子たち、カインとアベルの間で起こりました（創世記4章）。

〔1〕兄・姉と弟・妹

イエス・キリストがなされた有名な放蕩息子のたとえ話（ルカ15章）でも、家出した弟が乞食姿になって帰って来た時、父は大変喜んで盛大な祝宴を催しました。ところが父を助けて働いてきた孝行息子のはずの兄は、畑仕事から帰って来ても、怒って家の中に入ろうともしませんでした。どうしてか？ それは親からもらったお金で好き勝手に遊びまわり、一文無しの乞食になって帰って来た弟が大事にされて、盛大な食卓についたからです。真面目に働いて親を助けている自分が大事にされるのは当然だが、この怠け者が大事に扱われていることが、我慢ならなかったのです。

マルタとマリア姉妹の家にイエス・キリストが訪れた時も(ルカ10章)、姉のマルタはすぐさま台所で食事の支度を始めました。でも大事なお客さまは13人です。マルタは、自分を手伝わずにイエスさまのひざ元で話に聞き入っている妹のマリアに、腹が立ってきました。自分だけが損な役をさせられているように思えてきて、我慢できなくなりました。彼女は主イエスにこう言っています。「主よ、私の妹は私だけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」

このように兄弟姉妹が仲良く食卓を囲むことが、私たちの現実生活では本当に難しいのです。どちらも働き者の兄・姉が弟・妹に腹を立てています。年上の者の方が思慮も力も勝っていて、年下の者よりも良いことが出来るのは当然です。だから良く働いて人を助けることが出来たことを神さまに感謝して、喜んでいてもよさそうなのに、それが難しいのですね。

良く出来る者は何時もほめられ、大事にされていない気が済まないのです。一方良く出来ない者も、良く出来る者だけがいつも褒められ、良い地位を与えられる世の中に身を置いていますと、出来ない自分に劣等感を抱きます。抑え付けられて、伸び伸びと自分を発揮できなくなります。いじけて無気力になってしまいます。こうして互いに比べ合うことで心に生れる優越感と劣等感が、仲良く一緒に暮らしていける幸福を、至る所で破壊していきます。

我がまま勝手な弟がみじめな姿で帰って来た時に、もしも親孝行で働き者の兄が、「よく帰ってきたね。よかった、よかった。お父さんよかったね！」と喜んでいそいそと祝宴の席に着いたとしたら、どうだったでしょうか。もしもマルタが、ご馳走を三皿作りたところを一皿に端折って、「イエスさま、私もお話を聞かせて下さい」と手を拭きふきマリアの横に座ったらどうでしょうか。「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。」という神の家族が生まれるでしょう。

[2]ケリムの叫び

ジャン・バニエという思想家が居ます。彼は知的障害者の共同体「ラルシュ」(箱舟)を世界各地に100ヶ所以上も作りました。札幌教会員の大田姉がフランスのパリ近郊のラルシュでもう35年以上働いています。長男の誠が学生時代に8ヶ月間研修に行きました。私たち夫婦も訊ねたことがあります。大きな一軒屋に障害者とスタッフが家族のように共同生活をしていました。ピアフォンの町は大田姉を名誉町民にし、彼女のため墓地を提供しています。

バニエのリポートの中に、西アフリカにあるラルシュの一つに暮すケリムという少年の話がありました。彼は孤児院で3才の時、脳膜炎にかかり、重度の障害児になりました。孤児院で誰からも相手にされなかったので、話をする事も歩くことも出来ず、彼が出来ることといたら自分の頭を叩く自傷行為だけでした。それがラルシュに移って12年ほど暮すうちに、少し歩くこととロバに餌をやる事が出来るようになりました。

そのうちにリーダーがケリムの不思議な感性を発見しました。スタッフの間にわだかまりや争いが生じると、ケリムが自分の頭を叩き始めるのです。それがわかったリーダーたちは、ケリムの警告にハッと気付いて、感謝するようになりました。さすがにラルシュのリーダーたちです。偉いですね。

バニエはこう言っています。「健常者といわれる人々は、競争社会に生きているために、仲良く暮すことが

困難になっています。仲良く暮すよりも、派閥を作って争います。仲間をふやそうと、武器を手に入れて防衛体制を整えたりもします。遂には戦争を惹き起こします。そんな中でケリムたちが私たちにこう語りかけるのです。『なぜ争うの！なぜ仲良く暮せないの！』ケリムたちのこの叫びは、神さまが叫んでいる叫びではないでしょうか。「ケリムだけでは生きていけません。しかし健常者だけでも、世界は荒れていきます。障害者と健常者が互いに学び合って、共に生きる共生にしか、私たちの未来はありません。」

コリント教会はごたごたの絶えない教会でした。一緒に主の晩餐式が守れませんでした。そこで生みの親のパウロは、教会を多くの部分から成り立っている体にたとえて、一致を説いています。それぞれ皆違うけれども、優劣がなく、お前などいらぬなどと言われる部分はないこと、「それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです」(第一コリント12:)と言っています。どうしてでしょうか？それによってからだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互にいたわり合うようになるからです。

全ての生き物には一定比率で障害児が生まれてくるように定まっているそうです。人間の場合は 1000 人に 3 人位の割合で障害児が生まれてくるのが、自然の摂理だと言われています。神さまは人間の命をどうしてそのようにお造りになったのでしょうか。「ほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです」。皆が互いに思いやり、優しくいたわり合う心を造り出して、社会を一つにしていくように、神さまは 1000 人に 3 人位の割合で障害を持つ人をお造りになっていると、考えることが出来るのではないのでしょうか。

パウロは「ほかよりも弱い部分」とは言わず「ほかよりも弱く見える部分」と言っています。障害者は弱く、劣っていて、健常者は強くで優れていると思う者には、優劣に見えるでしょうが、神さまは障害者と健常者が互いに学び合って、共に生きていく、なくてはならないパートナーとしてお造りになっているのです。私たちは障害者にこめられた神さまの心をしっかりと受けとめなければなりません。良く働ける者と良く働けない者が、仲良く一緒に暮らしたら、「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。」という歌が、イエスさまの口から聞えてくるでしょう。

[結]この世のオアシス

私たち夫婦はこの一月から、すっかり小さくなってしまった川越教会の臨時牧師として招かれ、教会の再建に当たっています。私は川越教会がこの世のオアシスになって欲しいと願っています。砂漠や荒れ野を旅する人々に渴きを癒す飲み水と涼しい木陰を提供し、元気を取り戻して旅を続けさせるオアシスのような教会です。日曜日の礼拝に集った者たちが皆、7 日間の旅路の疲れを癒され、命を豊にされて、クリスチャンでよかったなーと嬉しくなり、さあもう一週間頑張ろう！またね！と声を掛け合って、それぞれの持ち場に戻っていける、神の家族の祝宴のような礼拝を守る教会でありたいと願うのです。

そうしたらこのオアシスのような教会に、私たちの周囲の方々が、日が経つにつれて一人二人と加わって下さるのではないのでしょうか。そしてイエス・キリストの十字架の愛・永遠の命の恵みに与ってくださるようになるでしょう。この世はまさに砂漠なのですから。

教会ほど種々雑多な人間の集団は、この世にありません。小学校なら6才から 12 才の児童。大学なら入学試験に合格した学力のある学生、会社なら役に立つだろうと選ばれた能力の持ち主だけの集団です。役に立たなければクビ、除外されてしまいます。ところが教会家族は、「イエスさまを救い主と信じます」と告

白しさえすれば、年齢・男女・国籍・経歴・地位・能力・性格など一切を問わずに、誰でも入れます。だからこれほどまとまり難い素地をもった集団は他にないでしょう。ごたごたが起きて当然です。でもこの教会がオアシスになれば、社会に対して大きな証となります。

そのために私たちは、イエス・キリストにしっかりと結びついていなければなりません。イエス・キリストは馬小屋の中で誕生しました。最も貧しい誕生です。でも飼い葉桶に眠る嬰兒の笑顔は平和の光に満ち溢れていました。生涯の終わりは十字架の死でした。最も卑しい死に方です。でも茨の冠をかぶされ、人々の侮辱と嘲笑のなかで、「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです」と祈りながら死んでくださいました。どんな境遇に置かれようとも、またどんな取り扱いを受けようとも、柔和な平安と優しい思いやりと謙遜さをもって、周りの者を包んで下さいました。

このお方の愛を頂けば、私たちもまた「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。」と歌う教会家族を作っていくことが出来るのではないのでしょうか。イエス・キリストを自分の救い主と信じて、その愛の命を豊かにいただきましょう。そして富里教会をこの世のオアシスにしていってください。

完